

神経発達症（発達障害）

神経発達症（発達障害）はいくつかのタイプに分類されており、自閉スペクトラム症（ASD）、注意欠如多動症（ADHD）、限局性学習症（SLD）などが含まれます。

神経発達症（発達障害）は、脳の発達が通常と違うために生じる特性のことで、いわゆる「病気」とは異なります。社会環境によってその特性は、利点にも、欠点にもなります。成長するにつれ、自分自身のもつ不得手な部分に気づき、生きにくさを感じることもあるかもしれません。しかし、特性を本人や家族・周囲の人がよく理解し、その人にあったやり方で日常的な暮らしや学校や職場での過ごし方を工夫することができれば、持っている本来の力がしっかり生かされるようになります。いくつかのタイプを併せ持つ人も多く、個人差が大きいため、それぞれの特性に合わせた対応が必要です。



自閉スペクトラム症（ASD）について知ってね

◎自閉スペクトラム症とは

典型的には対人関係や、コミュニケーションの苦手さ、興味や行動の偏りの強さといった特徴がみられます。自閉症スペクトラム症の人は、100人に1～2人といわれています。スペクトラムとは、連続性という意味で、典型的な特徴が強くあらわれる方からあまり目立たない方まで含まれます。

《典型的な特徴》

1歳を過ぎたころから、視線があわない、指さしをしない、ほかの子どもに関心がない、などのサインが現れます。一人遊びが多く集団行動が苦手など、人との関わり方が独特なことで気づかれることがあります。会話がつながらにくい、電車やキャラクターなど自分の興味のあることには何時間も熱中することがあります。

《治療》

幼少期に診断された場合は、個別や小さな集団での療育を受けることによって、コミュニケーションの発達を促し、適応力を伸ばすことが期待できます。言葉によるコミュニケーションに頼りすぎず、視覚的な手がかりを増やすなどの環境面の工夫をすれば、本人の不安が減り、気持ちが安定し、パニックが少なくなることが期待できます。

※自閉スペクトラム症そのものを治す薬はありませんが、二次的に不安症状やうつ症状、睡眠への影響がみられる場合には、症状に応じて薬が処方されることがあります。



注意欠如多動症（ADHD）について知ってね

◎注意欠如多動症とは

発達年齢に見合わない多動・衝動性、あるいは不注意、またはその両方の症状が、12歳までに現れます。学童期の子どもには3～7%存在し、男性は女性より数倍多いとされています。多動症状は、一般的には成長とともに軽くなる場合が多いですが、不注意や衝動性は青年期以降まで続くことがあります。

（典型的な特徴）

座っていても手足をモジモジする、席を離れる、じっとしてられない、順番を待てない、他人の会話に割り込む、うっかりミスが多い、課題や遊びなどに集中し続けられない、課題や作業の段取りが下手、忘れ物や紛失が多い、などがあります。これらの症状が学校や家、職場など複数の場面で見られます。

（治療と対応のポイント）

治療は、薬物療法と行動変容、生活環境の調整が行われることが多いです。生活環境の調整としては、集中を妨げる刺激をできるだけ周囲からなくすことが重要です。また集中しなければいけない時間は短めに、一度にこなさなければいけない量は少なめに設定し、休憩をとるタイミングをあらかじめ決めておくことも効果的です。



限局性学習症（SLD）について知ってね

◎限局性学習症とは

全般的な知的発達には問題がないのに、読む、書く、計算するなど特定の事柄のみがとりわけ難しい状態をいいます。読みの困難については、男性が女性より数倍多いとされています。

（対応のポイント）

それぞれの障害特性に応じた教育的な支援が重要です。読むことが困難な場合は大きな文字で書かれた文章を指でなぞりながら読んだり、書くことが困難な場合は大きなマス目のノートを使ったり、計算が困難な場合は絵を使って視覚化するなど、それぞれに応じた工夫が必要です。親と学校とが、子どもにある困難さを正しく理解し、決して子どもの怠慢のせいにならないで、適切な支援の方法について情報を共有することが大事です。

＝神経発達症（発達障害）に関する相談先には下記の機関があります＝

- ・名古屋市発達障害者支援センターりんくす名古屋 ・療育センター（担当区）
- ・お住いの区の保健センター



名古屋市いのちの支援広報キャラクター「うさじ」 ©becco